〔島根女子短期大学紀要　Vol. 33, 41～50 (1995)〕

一幼児における自閉発達障害の出現

長　嶋　瑞　穂
(保育研究室)

The Emergence of Autistic Developmental Disorder in An Infant

Mizuho NAGASHIMA

キーワード：発達段階，遅滞，自閉障害，DSM－Ⅲ－R基準

1．はじめに

乳幼児期において発達障害が顕在化することは事実によって確かめられてきたことである。ことに，発達障害は発達の質的転換期において，明確に把握されることが明らかにされている（田中昌人：1980，1987；田中杉恵：1990)。特に1歳半頃と3歳頃は，制度としての乳幼児健康診査の実施によって，一般的にも障害発見に関連の年齢として広く認められてきている（長嶋：1980)。

1歳半頃と3歳頃の時期は自閉障害の顕在化においても関連深い年齢である。自閉障害の発症は，初期のカナー（1946）の報告で，早期幼児自閉症とよばれるようになったことが示すように，生まれて間もなくからの異常とされている。その後，情緒的問題のみでなく認知的障害の存在とその重症さと特異性が注目され，発達障害の一種に位置付けられてきた（ラター・ショプラー：1987)。発症は3歳までに，自閉障害と見なされる，質的異常があること（DSM－Ⅲ－R基準）とされている。この年齢限定にも問題は残されている（ラター・ショプラー：1992）ものの，自閉障害が育て方等の環境的要因ではなく，生得的生理的に規定されて発症することは，多くの証拠によって確認されている。自閉障害は乳幼児期において，その行動発達にともなって現れてくる。それは出生時において既に内的に存在していた何等かの生理的損傷が，年齢的に成長し発達することにより，露呈してくると考えられる。

自閉障害は生理的診断方法に依拠せずに，発現する行動特徴の質的異常によって診断される症候群である。それら質的異常は発達水準によって，正常であるか異常であるか判断の枠組みが微妙に変化する。

既に，自閉児の発達についてはその固有の段階Ⅰから段階Ⅲにいたる発達段階を把握している（藤本・長嶋：1981；長嶋：1983)。そして，自閉児の常同行動や同一性保持行動の一部，エコラリー等も，発達段階と生活年齢との関連で消長があることを明らかにしてきた（長嶋：1994)。

発達的視点から，さらに自閉障害発現の問題に詳細な検討を試みる必要があると考える。そこで，自閉障害と考えられた一幼児を取り上げて，行動発達と，DSM－Ⅲ－Rの基準による自閉障害発現とのかかわりを縦断的に検討し，その関連性を把握したい。そして，それらの変容過程に対応した発達段階をも明らかにしたい。

第１表　発達段階別下位項目

発　達　段　階	言語－認識レベル	手－指レベル	軀幹－四肢レベル
示性数１可逆操作期	① 人に自ら発声 ② 初期の人見知り	① 積木　片手把握 ② 手から手へもちかえ ③ 頭布　布つかみ取り	① 寝返り ② お座り
示性数２形成期	① 人見知り ② マンマンマン等喃語	① 積木　両手把握 ② 積木とコップ　積木さわり ③ 鐘の柄つかみ	① 後ろへはいはい
示性数２可逆操作期	① バイバイに反応 ② メンメに反応	① 積木　両手打合せ ② 積木とコップ　取り出し ③ 鐘　横振り	① はいはい ② つかまり立ち
示性数３形成期	① 頂戴にさしだすのみ ② 指さしに反応	① 指先での把握（ピンチ） ② 積木とコップ　入れる試み ③ 鐘舌に指先	① つたい歩き
示性数３可逆操作期	① 頂戴に渡し ② 大人とボール遊び ③ 場面にあった音声模倣	① 積木とコップ　出し入れ ② はめ板　円板はめ ③ 紐付き輪　紐でぶらさげ	① 片手支え歩き ② 一人立ち
１次元形成期	① 定位の指さし ② ワンワンは等に反応	① なぐりがき ② はめ板・円（回）　角孔へ ③ 丸棒の挿入	① 歩行 ② すべり台　頭から，又は眺め
１次元可逆操作期	① 語彙・３語以上 ② 身体各部3/4 ③ 可逆の指さし	① 積木の塔・３個 ② はめ板・円（回）正 ③ スプーンで食べる	① 行き－もどり ② すべり台足から ③ ふとん足から
２次元形成期	① ２数復唱 ② 大小比較 ③ 長短比較	① 汽車の模倣 ② 形の弁別Ⅰ　3/5 ③ 円模写 ④ 十字模写	① 飛び降り ② その場跳び ③ 階段昇降
２次元可逆操作期	① ４数復唱 ② 数えらび４個 ③ 了解Ⅱ	① 正方形模写 ② 重さの比較（２個） ③ 交互開閉	① ケンケン ② スキップ

以上のように，自閉障害の発現過程を行動発達との関連で把握することがこの報告の目的である。

2．対象と方法

1）対　象

S児（女）を対象とする。本児は乳児期より発達の遅れとてんかん発作があり，1歳より抗てんかん薬の治療を受けている。その生育歴の概要は次の通りである。

〈S児の生育歴〉

S児は1980年生まれ。第2子。生下時体重3,200グラム。妊娠中は順調で，予定日より6日遅く骨盤位で生まれる。生後1ヵ月頃抱き上げた時にびっくりしたような反応がよくでた。泣いてばかりで笑わなかった。3ヵ月で首がすわり，6ヵ月頃食事させている時目が合わないこと，外出すると泣いてばかりいること，泣くと目の焦点が合わないことに気付いた。10ヵ月で座り始め，11ヵ月で寝返り始めるが，座位や肘支位の時に前屈または前傾の発作がでた。1歳時にK病院小児科でてんかんの治療を受け始めた。同時にSi肢体不自由児通園施設で機能訓練を受け始めた。1歳3ヵ月に前屈発作は消える。はいはいができ始める。1歳4ヵ月でつかまり立ちとつたい歩きをし始めるが，頭を右に向けて眼球は左に流れる発作が出て，てんかん治療を継続する。

1歳5ヵ月時O小児保健センターの医師に自閉障害の疑いを指摘される。1歳6ヵ月からK病院小児科の発達相談室で発達相談を受け始める。

2）方　法

(1) 資　料

発達相談時点で得られたK式発達検査とその他の下位検査項目結果，観察記録，行動発達と問題行動に関する母親からの報告を用いる。

(2) 期　間

S児の生活年齢1歳6ヵ月（1981）から4歳8ヵ月（1984）までに7回の発達相談が実施された。

(3) 手続き

a　K式発達検査は1958年第2次改訂換算表により，社会性（S）・適応性（A）・運動性（M）・平均の発達年齢と平均発達指数が算出された。

「達成比」は各診断回間の発達年齢（月齢）の増減を，各診断回間の月数で割ったものである。健常発達の「達成比」の標準値は1.0である。

b　可逆操作の高次化における階層－段階論により発達段階を決めた。**第1表**の下位項目を診断に用いた。言語－認識レベル・手－指レベル・軀幹－四肢レベル別に当該段階の全項目通過をその段階獲得とした。1項目でも未達成の段階と，1項目でも達成の段階を考慮に入れ，「先行段階に弱さもちつつ後続段階」とした。発達達成度のずれの決定はA基準により，発達の層化現象の決定は，2期以上の発達の質的転換期にまたがるものとした（長嶋：1988参照）。

c　S児の発達障害と行動特徴をDSM－Ⅲ－Rの自閉障害の診断基準にもとずき「社会的相互作用」，「コミュニケーションと想像」，「活動レパートリーと興味」の3分野に整理した。

d　発達検査及び発達相談は長嶋が実施した。各発達相談回ごとに，母親からS児の行動発達と特異な行動特徴について聴取した。その時ごとに母親の悩みや心配に答え，指導事項について助言した。助言内容のポイント，てんかんの治療，所属等の経緯を一覧に表示した。

3．結　　果

第2表はS児の全7回のK式発達検査結果である。平均発達年齢は，第1回10ヵ月から第7回1歳7ヵ月へと漸増しているが，発達指数は第1回56から第7回34へ低下している。領域別発達年齢を見ると，第1回はM1歳1ヵ月であるのにAとSは8ヵ月と劣弱である。第2回ではM1歳4ヵ月であるのに，A1歳1ヵ月とやや劣りS10ヵ月とさらに劣っている。第2回のように，Mが相対的に優れAがそれに続きSが最も劣弱な傾向は，第7回まで一貫している。これは知的障害児に一般的傾向である。

第3表はS児の発達「達成比」である。Sは0.33から－0.2の低い値であり，Aは0.71から0であり，Mは1.13から0の間の相対的に高い値を示す。Sでは2歳半から3歳半間に退歩がある。Aでは2歳から3歳間と3歳半以降，Mでは2歳半から3歳半間と4歳以降に停滞がある。平均では2歳半から3歳半間に停滞を示している。

第4表はS児の下位項目通過の結果を一覧にしたものである。S児は第1回診断時に積木を拒否し，布に固執した。積木を布で包んだり，コップに入れて示すことで積木に触れさせる工夫が必要だった。この傾向は徐徐に改善されたが，布を好む特徴は第

7回診断時まで継続した。

第5表は各発達診断回の3レベル別発達段階である。第4回診断（生活年齢3歳）と第5回診断（生活年齢3歳6ヵ月）時の言語－認識レベルの退歩は，

第2表　S児のK式発達検査結果

発達診断回	生活年齢	発達年齢	発達指数
第1回	1：6	S 0：8 A 0：8　平均0：10 M 1：1	56
第2回	2：1	S 0：10 A 1：1　平均1：1 M 1：4	52
第3回	2：7	S 0：11 A 1：1　平均1：3 M 1：9	48
第4回	3：0	S 0：10 A 1：1　平均1：3 M 1：9	42
第5回	3：6	S 0：9 A 1：2　平均1：3 M 1：9	36
第6回	4：2	S 0：10 A 1：2　平均1：6 M 2：6	36
第7回	4：8	S 1：0 A 1：2　平均1：7 M 2：6	34

注）発達年齢：1958年改定版換算表による算定
S：社会性，A：適応性，M：運動性，平均：MASの平均値
発達指数：平均発達年齢より算出

第3表　S児の発達「達成比」

発達診断回	生活年齢	発達「達成比」			
		S	A	M	平均
第1回	1：6				
		.29	.71	.43	.43
第2回	2：1				
		.17	.0	.83	.33
第3回	2：7				
		－.2	.0	.0	.0
第4回	3：0				
		－.17	.17	.0	.0
第5回	3：6				
		.13	.0	1.13	.38
第6回	4：2				
		.33	.0	.0	.17
第7回	4：8				

注）S：社会性，A：適応性，M：運動性

マンマンマン等の反復喃語と母親の音声模倣ハーイハーイが消え，アー等のみになったことに関係している。反復喃語の消失は，第7回診断まで回復することがなかった。他機能の進歩があり対人関係にも改善があったにもかかわらず，反復喃語は改善されない。これは，新たに構音障害が出現したととらえられよう。構音障害のある場合には，反復喃語の有無を，発達段階決定の基準項目にすることに疑義が生じてくるであろう。この点を考慮して，第6回と第7回の診断については修正発達段階を記した。

第5表の手－指レベルの発達経緯は，第3回診断から第6回にかけて進歩と退歩をくり返している。これは，はめ板を円孔に入れる課題の通過不通過の不安定性に関係している。第3回では検査者が円孔を指さすとS児は指で円孔をつついた後，なんども教示されて入れた。第4回では円孔の横に置いた。第5回では円板を噛み円孔へ落とし込んだ。第6回では三角孔に置いた。S児は円板を円孔へ入れる行為は遂行可能であるが，検査者の教示を理解しにくいと見えた。

全ての診断回で発達の層化現象がある。それは，第1回診断では発達の質的転換期2期にまたがり，第2回から第5回までは3期に，第6回と第7回では2期にまたがっている。

第6表はS児の自閉障害に関連する行動特徴である。第1回診断時には人見知りもなく，視線も合わなかったが，徐徐に改善され，母親への後追いも出てきた。それと共に，クレーン現象が広汎な場面で目立ち，クレーンで人とかかわる時期が永く続く。やがて，指さしで人とかかわり始めるとクレーン現象は減少している。指さしは最初は物に密着した突き刺すようなポーキングから定位の指さしへ，そして，知っている物を見つけると指さして母を見る可逆の指さしへと発達している。

物の端を持ちかざして振り下から眺めるというパターン化した物にかかわる行動とカーテンとのれん，布への固執は形を変えながらも継続している。第7回診断時では生活習慣行為の儀式化，名前に振り向きにくい，言葉がない，カーテンへの固執があるが，これらは強度な特徴とはいえない。新たにカレンダーや車への興味と犬をこわがる特徴が表れて，1次元可逆操作の獲得前後にいる知的障害児に類似した発達障害像を示している。

第7表は自閉児と見なした各発達段階と助言内容

第4表　S児の発達検査下位項目通過

発達診断回		第1回			第2回			第3回			第4回			第5回			第6回			第7回		
発達レベル		言語—認識レベル	手—指レベル	軀幹—四肢レベル	言語—認識レベル	手—指レベル	軀幹—四肢レベル	言語—認識レベル	手—指レベル	軀幹—四肢レベル	言語—認識レベル	手—指レベル	軀幹—四肢レベル	言語—認識レベル	手—指レベル	軀幹—四肢レベル	言語—認識レベル	手—指レベル	軀幹—四肢レベル	言語—認識レベル	手—指レベル	軀幹—四肢レベル
発達段階	下位項目番号																					
示性数1可逆操作期	①	÷	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	②	÷	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	③	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／
示性数2形成期	①	÷	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	②	+	÷	／	+	+	／	+	+	／	−	+	／	−	+	／	−	+	／	−	+	／
	③	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／
示性数2可逆操作期	①	−	−	+	−	+	+	−	+	+	−	+	+	−	+	+	+	+	+	+	+	+
	②	−	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	③	／	−	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／
示性数3形成期	①	−	−	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	②	−	−	／	+	+	／	+	+	／	+	+	／	+	+	／	+	+	／	+	+	／
	③	／	−	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／	／	+	／
示性数3可逆操作期	①			+	÷	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	②			+	−	−	+	−	+	+	−	−	+	−	+	+	÷	−	+	+	+	+
	③			／	−	+	／	+	+	／	−	+	／	−	+	／	−	+	／	−	+	／
1次元形成期	①			−	−	−	+	−	−	+	−	÷	+	+	+	+	+	+	+	+	+	+
	②			−	−	−	+	−	+	+	−	−	+	−	÷	+	+	−	+	+	+	+
	③	／		／	／	−	／	／	−	／	／	−	／	／	−	／	／	+	／	／	+	／
1次元可逆操作期	①			−		−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	+	−	−	+
	②			−		−	−		−	+	−	−	+	−	−	+	−	−	+	−	−	+
	③			−		−	−		−	−	−	−	+	−	−	+	−	+	+	−	+	+
2次元形成期	①								−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	÷
	②								−	−		−	−	−	−	−	−	−	−	−	−	−
	③								−	−		−	−	−	−	−	−	−	+	−	−	+
	④	／		／	／		／	／	−	／	／	−	／	／	−	／	／	−	／	／	−	／
2次元可逆操作期	①																		−			−
	②																		−			−
	③			／			／			／			／			／			／			／

注）＋：通過，÷：微妙な通過，−：不通過，／：該当項目なし

である。S児の通園先とそこで受けた主な訓練，てんかん発作の消長を備考に記した。母親は熱心に育児や治療に当たり，助言をできるかぎり実行していった。固執行動の改善，対人関係の改善，偏食の改善，身振り模倣の獲得，集団参加など，母親の努力に負うことが多かった。

S児の生活年齢3歳8ヵ月時の引き篭もりは，姉の入院に母親が付き添ったため，その間祖父の家に2週間預けられたことで起きた。S児は祖母に保育されるが，部屋の隅に座り込み動かず，笑顔がなくなり指さしも全くしなくなった。自宅に帰ってもその状態は続き，母親の努力によってすこしづつポーキングがでて，指さしが出始め，3ヵ月後に元の状態に戻った。その後カーテンを指さしアーと発声して母を見る，いただきますやごちそうさまで合掌の身振り語，手洗いや入浴時に見通しのある動作などへと進歩した。母親は第6回の相談時においてこの経緯を報告し，「もうこりごりした，今後は決して預けない。」と述べた。また，最近の良好な発達と行動の変化について「情緒的には落ちついている。この人に勝ったと思う。」と述べた。てんかんの治療は医師の指示により服薬を続けてきた。また，保育所入所は第1回相談時から母親の希望であり，S児が4歳7ヵ月時に実現した。

さらに，自閉児の発達段階として段階Iに先行する前段階Iの存在を，このS児の事例によって縦断的に確認できる。前段階Iの特徴は，発達の層化現象が示性数2可逆操作から示性数3可逆操作にまたがっている。そして，人見知りがなく，視線を合わさず，体に触れられるのを拒否し，模倣がなく，新しい場面でパニックになり，部屋の中を同軌的に移動し，多動で，偏食も強く，物に独特の操作方法で固執的に関わるなどの行動がある。

4．考　　察

S児の場合，乳児の前半期に笑わない等の所見はあったが，定頚3ヵ月と正常と見えた。生後6ヵ月から眼球上転，前屈のてんかん発作の出現に平行して，座位，寝返り，伝え歩きに至る，行動発達の遅れが明確になっている。母親は6ヵ月で向き合った時も視線が合わない，泣くと目の焦点が合わないことに気付いていた。てんかんの治療により1歳3ヵ月で前屈発作が消えるとともに，目の焦点が合ってきた。この時期，S児にはてんかん治療と機能訓練

第5表　S児の発達診断結果

発達診断回	発達段階			発達の層化現象
	言語－認識レベル	手－指レベル	軀幹－四肢レベル	
第1回	示性数2形成期	示性数2形成期	示性数3可逆操作期	○
第2回	示性数2可逆操作期 ～示性数3可逆操作期	示性数3可逆操作期	1次元形成期	○
第3回	示性数2可逆操作期 ～示性数3可逆操作期	1次元形成期	1次元可逆操作期	◎
第4回	示性数2形成期 ～示性数3可逆操作期	示性数3可逆操作期 ～1次元形成期	1次元可逆操作期	◎
第5回	示性数2形成期 ～1次元形成期	1次元形成期	1次元可逆操作期	◎
第6回	示性数3可逆操作期 ＊ ～1次元形成期	示性数3可逆操作期 ～1次元可逆操作期	2次元形成期	○
第7回	示性数3可逆操作期 ＊ ～1次元形成期	1次元可逆操作期	2次元形成期	○

注）～：先行段階に弱さもちつつ後続段階
○：2期の質的転換期にまたがる発達の層化現象
◎：3期の質的転換期にまたがる発達の層化現象
＊：修正発達段階

第6表　S児の自閉障害に関連する行動特徴

発達診断回	生活年齢	社会的相互作用	コミュニケーションと想像	活動レパートリーと興味
第1回	1：6	人見知りなく誰にでも抱かれる 欲しい物を人がもってても相手の顔を見ずに取る 検査場面になかなか入れない 砂場に裸足でおりたり，水遊びで水がかかるとパニックとなる 名前に振り向かない　模倣を全くしない	視線あわさない いないいないばあに相手の顔を見ずに手や布を見て笑う バイバイ等手をとってやらそうとすると嫌がる 反復喃語ある	本・はめ板・ペン・布等持ったらかざして振って下から眺めて喜ぶ 部屋の中をぐるぐると同軌的に移動する 多動である 偏食強い　コップでないと飲まない 歯ぎしり・夜泣き多い 物の好き嫌い激しい
第2回	2：1	人見知り弱いが，母と祖母見くらべて母の方へ行く 人の着けてるアクセサリーほしくて目を近づけるが相手の顔を見ない 新しい場所で好きな物を見つけて場面に慣れるのが早くなる 名前に振り向かない　模倣しない	視線あいにくいが，母の膝の姉をのかせたい時哀願する感じで母を見る カーテンに隠れてばあとするが相手の顔を見ない 反復喃語ある	カーテンを振って喜ぶ 掃除機の音・机叩く音に耳をくっつけて聞く 鐘の音にはすぐ振り向かない 偏食強い
第3回	2：7	2歳5ヵ月よりクレーン現象で人とかかわる カーテン・布で人とひっぱりっこする 姉の持つ人形をのぞきこみ手をだす 人が体にさわるのを嫌がらなくなる 名前に振り向かないが母の後追いし始める	視線あう いないいないばあに相手の顔を見る 反復喃語ある 母の音声模倣ハーイハーイはまねる 人のバイバイ・手遊び等をじっと見る 牛乳飲みたい時哺乳ビンの上に乳首おく	カーテンを縦に振って喜ぶ横には振らない 持った物はなんでも口へやる 偏食へる 日課の見とおしがもてて待てる 布と他の物をあわせて遊ぶ
第4回	3：0	クレーン現象で人とかかわる 否定肯定明確　涙ながす，だだこね，やきもち等感情表現多様になる 物を取られそうになると逃げる 名前に振り向かないが母を見ると突進してくる	反復喃語きえるウァーウァー，アーアー等の発声多い 母の音声模倣なくなる バイバイを見て後，手をあげる・両手腰のあたりでばたばたすることがある	持った物はなんでも口へやる 布と多種の物の組み合わせで隠したり入れたりして遊ぶ つり輪にハンカチをぶら下げて振って喜ぶ 布のあつかいは巧緻である
第5回	3：6	クレーン現象で人とかかわる 気持ち伝える時母を見て首かしげ，いやの時首ふる 哺乳ビンにふたをすると儀式的に拍手する 名前に振り向かないが母に甘える	反復喃語なくアーアー等の発声多い 音声模倣なし バイバイ模倣ないが手を持ってさしても嫌がらない 牛乳を飲みたい時，哺乳ビンを指さして母を見る，牛乳を飲んでる従兄弟の横へ行き頂戴をする	持った物はなんでも口へやる のれん振ったり表裏を見比べたり潜って喜ぶ 物を持ってぐるぐる回る 多動でなくなる
第6回	4：2	指さしが増えクレーン現象で人とかかわるのが減る 人の言葉だけでは困難だが，指さすと持って行って，持って来て等行動できる 名前に振り向かないが手をたたいたり，肩にさわると振り向きもどれる	反復喃語ない　音声模倣ない バイバイの模倣して手をくるくるまわす 要求は手を引っ張って実物を指さす，自分の左掌に右手で指さす ハンカチを座布団・布団に見立てる動作をする	持った物はなんでも口へやる カーテンを喜ぶが誘われると他の遊びもする 同じ車・絵本・玩具・電車の絵・机・カレンダーがわかり指さす，見比べる 靴を足・櫛を髪・手袋を手にくっつける
第7回	4：8	指さしが増えクレーン現象で人とかかわるのが減る 日常動作を手を持ってさせても抵抗なくすぐ模倣できる 生活習慣の手順を儀式的に行動する 名前に立ち止まり振り向くことが時にある 他児が抱きついても嫌がらなくなる	反復喃語ない 音声模倣ない 奇声が減る いろんな場面で自らバイバイする 早くほしい時は自分の左掌に右手で指さす 他児の手を引っ張りカーテンにくるんで大喜びする	持った物・特に新しい物は口へやる カーテンで遊びたがり指さして泣き座り込む 車の玩具好き 車・自転車乗せられるのも好き スプーンは右手で食物をすくい，それを左手掬みで食べる 平気だった犬をこわがるようになる

第７表　Ｓ児の発達段階と助言内容

発達診断回	生活年齢	自閉児の発達段階	助言内容	備考
第１回	１：６	前段階Ⅰ	体をよく動かす：階段這い上がりなど 嫌なことを放置しない：模倣・積木など 固執的行動に介入し人とかかわらせる：布・同軌的移動・偏食など	Si肢体不自由児通園施設で機能訓練中 てんかん発作消去
第２回	２：１	前段階Ⅰ	歩く力を強める：靴・裸足など 身振り模倣を毎日たくさんする：オツムテンテン・アババ・イヤイヤなど 砂場や水で遊ぶ：始めは触ることから	自宅転居によりSu肢体不自由児通園施設へ転園 感覚統合訓練週１回開始
第３回	２：７	段階Ⅰ	手遊び・指遊びを毎日する：手を添えて始めは一種から 肯定否定をはっきり示す：ほめる・叱る等 人の言葉に注意させる：口もとを見せて	Su園でインリアル訓練参加
第４回	３：０	段階Ⅰ	手遊び・指遊びを毎日たくさんする：人と一緒に楽しく 肯定否定をはっきりさす：いい・いや等 体を大きく動かし発声活動をうながす	Su園卒園 Ｙ精神薄弱児通園施設へ入園 朝と食事時てんかん発作
第５回	３：６	段階Ⅰ	しっかり遊ぶ：砂・水・紙等で人と楽しく 肯定否定をはっきり表現させる：して・やめて等が人につたわるように 体を大きく動かし発声活動をうながす	てんかん発作消去 Ｋろう学校で聴能について相談，特に指示なし ３歳５ヵ月より交流保育に参加
第６回	４：２	段階Ⅱ	ゆたかに遊ぶ：玩具・素材等で人と楽しく 身振り語をうながす：挨拶・要求等を生活の節々で自発的に 発声活動をうながす：かむ・ふく・吸う等	３歳８ヵ月時祖父宅に２週間委託され，極度の寡動 自宅に戻り３ヵ月後回復 眼球上転てんかん発作
第７回	４：８	段階Ⅱ	集団でゆたかに遊ぶ：玩具・本・歌等を人と楽しむ 発声を伴った身振り語をうながす：挨拶・要求等で他児とのかかわり多く	４歳７ヵ月より保育所入所

が重要と考えられていた。１歳５ヵ月に自閉障害の疑いが指摘されて以降，主な問題はてんかんと自閉障害となった。

第１回診断の生活年齢１歳半のＳ児は，発達段階等から知能障害が明確であり，てんかん治癒によってどこまで遅れが追いつくかが注目された。結果として生活年齢４歳８ヵ月で「示性数３可逆操作に弱さもちつつ２次元形成期」の発達段階となり，知能障害はより重度になった。

この間に３歳で反復喃語と音声模倣が消失した。この原因は特定しがたいが，てんかん症に付随するなんらかの機能の損傷，自閉障害の非典型，通園施設の転園との関係が考えられる。しかし，その後の経過から考えて環境的な要因（転園）ではないであろう。環境的変化が原因ならば，外的条件の改善により行動上の問題も通常回復する。Ｓ児の場合でも３歳８ヵ月時の母親との２週間の分離による極度の寡動と引き篭もりの挿話がある。この退行的状態は，母親の養育により３ヵ月後に回復している。生理的損傷に起因する負の行動変化は母性的養育のみでは回復しがたい。反復喃語と音声模倣の消失は，生理的損傷に起因すると考えざるを得ない。

次に，Ｓ児の自閉障害の特徴的行動の出現について考えたい。DSM－Ⅲ－Rの自閉障害の診断基準は，

「社会的相互作用」分野5項目から2項目・「コミュニケーションと想像」分野6項目から1項目・「活動レパートリーと興味」分野5項目から1項目を含む8項目以上の質的異常の存在である。第1回・第2回診断の1歳半から2歳時では，S児は自閉障害であると言えよう。その発達段階は，自閉児の前段階Iである。その後母親を後追いし視線を合わせ，模倣も少しできて布を様様に扱い，クレーン現象の出現と減少などがあった。第7回では対人関係に改善があり，発達の層化現象も無言語の精神遅滞児に見られる型に収束しつつあった。ただし，S児の布への興味の集中は最初から最後まで続いた。積木の拒否は徐徐に改善されたが，発達検査の実施には常に工夫が必要だった。「はめ板　円坂はめ」課題に見たように，言語理解の困難さは改善されてはいるものの，特に顕著であった。第6回よりカレンダーや車への興味の新しい出現もあり，S児は自閉障害をもつと考えざるを得ないだろう。S児はクーシオ（1978）が報告している無言語自閉児群の発達特徴と対応し，今報告はその縦断的事例の提示と考えられるかもしれない。ヴォルクマー他（1992）のいうように，自閉障害の発達的側面からの検討は今後もなされるべきである。

5．要　　約

この報告の目的は，自閉障害が発達と相互関係をもちつつ，いかに出現し変化していくかを把握することである。そのために，発達遅滞とてんかんをもつS児（女）の縦断的事例が検討された。S児の生活年齢1歳半から4歳8ヵ月の間に，7回実施された発達相談時の発達検査結果と，母親からの報告を資料とした。この間S児は，自閉児の発達段階の前段階Iから段階Iをへて段階IIに達した。自閉障害として，当初布への固執，視線が合わない，模倣がない，言葉の理解がない，身振りがない，言葉を話さない，物の扱いがパターン化している（端を持ちかざして振り眺めて喜ぶ），同軌的に部屋の中を移動する，多動，強い偏食等があった。それらは発達とともにあるものは形を変え，または改善し解消した。当初あった反復喃語と音声模倣が消え，クレーン現象を用いて人と関わる行動が出現急増し，やがて減少する，新たにカレンダー等への興味が現れる過程が見出だされた。

引　用　文　献

American Psychiatric Association : *Diagnostic and Statistical Manual of Mental Disorders 3rd ed. Rev.*, Author, Washington, DC (1987).

Curcio, F. : Sensorimotor functioning and communication in mute autistic children. *Journal of Autism and Childhood Schizophrenia*, **8**, 3, 281−292 (1978).

藤本文朗，長嶋瑞穂：自閉症児（自閉的傾向を含む）の研究1 —その発達と教育の基礎的理解のために—，障害者教育科学，3，33−54（1981）.

Kanner, L.: Irrelevant and metaphorical language in early infantile autism. *American Journal of Psychiatry*, **103**, 242−245 (1946).

〔カナーL.（十亀史郎他訳）：幼児自閉症の研究，黎明書房，（1978）所収〕.

長嶋瑞穂：乳幼児健康審査の意義と課題，心理科学，**3**，2，1−10（1980）.

長嶋瑞穂：自閉的傾向児の交通手段の発達，障害者問題研究，34，52−65（1983）.

長嶋瑞穂：発達の質的転換過程の研究7 —自閉児の発達診断—，島根女子短期大学紀要，26，135−144（1988）.

長嶋瑞穂：自閉児の常同行動，島根女子短期大学紀要，32，33−38（1994）.

Rutter, M. and Schopler, E. : Autism and pervasive developmental disorders — concepts and diagnostic issues —. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **17**, 2, 159−186 (1987).

Rutter, M. and Schopler, E. : Classification of pervasive developmental disorders — some concepts and practical considerations —. *Journal of Autism and* Developmental Disorders, **22**, 4, 459−482 (1992).

田中昌人：人間発達の科学，青木書店，東京（1980）.

田中昌人：人間発達の理論，青木書店，東京（1987）.

田中杉恵：発達診断と大津方式，青木書店，東京（1990）.

Volkmar, F. R. et al. : Developmental aspects of DSM−Ⅲ−R criteria for autism. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, **22**, 4, 657−662 (1992).

（平成6年10月31日受理）